

研修Ⅰ 高松 児童が言葉を通してつながり合う国語科授業の創造

～「課題を解決したい」という願いをもち、「話せた・聞けた・書けた・読めた」という自己の伸びを実感する授業づくり～

『『とい』があったよ！『こたえ』をみつけよう！—『どうやってみをまもるのかな』—』（東京書籍1年上）

1 提案の概要

(1) 単元について

低学年における説明文の学習において、文章中から問いと答えの関係を見つけ出したり、事柄の順序を考えたりしながら読むことは、読む力を育てていく上で基盤となるものである。児童が「分かった・できた」と感じ、楽しいと思える単元・授業づくりをするために、本研究では振り返りを重視し、振り返りの想定から単元構成につなぐ実践を行った。1年生の説明文教材は「さとうとしお」から始まり、次に「どうやってみをまもるのかな」がある。両単元ともに、問いと答えの関係が明確な文章であるとともに、段落で扱う事柄が、分かりやすく身近なものから、児童にとって見えにくく知らないものへと変わっていくという、事柄の順序性をつかみやすい教材である。

(2) 学習指導について

①児童の振り返りの想定から単元を構成する

今回の実践では、「問い」と「答え」の文章構成を意識させるために、この2つの単元の学習を連続して行った。そうすることで、「前と同じように、今回も、問いと答えの文章を見つけることができそうだ。」と、「できそう」「やってみたい」といった、児童の学習に向かう力が高まることを期待した。

計画段階における児童の振り返りは、まず本時（第8時）から想定した。それまでの学習で事柄の順序を考えて読む力が身に付いたとすれば、本時で扱うスカンクの文章では、ヤマアラシやアルマジロの文章の共通点や相違点に気付いている旨の発言が、振り返りの際に出現する事が予想された。そのような振り返りを児童が行うためには、前時までどのようなことを理解させておけばよいか想定することができ、さらにさかのぼって、初発ではどのような気付きや願いを児童がもっておくとよいかという見通しを立てることができる。そのようにして作成した児童の振り返りの想定を基に、本単元の学習活動を計画した。

②教材・教具の工夫

○説明文ハウス

「はじめ」「なか」「おわり」に分け、書かれている内容をまとめていくことで、文章構成を意識することができた。工夫点として、書かれている内容（動物の名前・体のつくり・問い・答え・くわしい身の守り方）ごとに一文ずつ色分けできるようにした。そうすることで、それぞれの動物の説明の文章は、上記の5つの内容が繰り返し出てくることを気付くことができた。

○インタビューブックの作成

文章に書かれていることを読み取った後、グループで書かれている内容について質問したり答えたりする活動を行った。質問に対して、本文から必要な言葉を探して答えることができれば、その内容を理解したということになる。実際に使用したインタビューブックでは、質問を本文の下に書いておき、答えとなる部分を線で囲んでつなぐという方法をとった。

○なりきりセット

それぞれの動物の身の守り方について動作化することで、本文の言葉とつないで正しく読み取れているか確かめたり、本文には言葉として出てこない様子まで想像したりすることができた。例えば、ヤマアラシでは、「てき」「とげ」「うしろむき」といった言葉の意味を考えながら、内容に合う動きをすることで、敵を意識した動きをしなければいけないと気付けた。アルマジロでは、「もつとなりきってみたい。」という児童の意欲を受けて、甲羅に見立てた「なりきりセットを作成し、それをかぶってじっと待つ動作をすることで、敵をあきらめさせるという、身の守り方の違いに気付い

きりセット」を教師が作成し、それを使って動作化したことで、敵があきらめるまで動かないという、ヤマアラシとの身の守り方の違いに気付くことができた。そしてスカンクの身の守り方は逆立ちと、お尻から汁を飛ばすという2段階がある事を理解するとともに、なぜ最初から汁を飛ばさないのだろうかという新たな疑問をもつことができた。動作化を取り入れたことで、動物たちの身の守り方についてより興味をもって追究しようという姿勢が見られた。

2 質疑応答

Q：振り返りを想定した単元構成について、教師が想定する振り返りは、学びが集約されたまとめに近いものであると思うが、具体的にどういったものか？

A：振り返りを想定することにした理由は、振り返りによって自分の伸びを実感するため。児童が主体となった学習を目指し、出てくるであろう児童の言葉を想定した。しかし、1年生の児童にとって、まだ書くのは難しいため、発言として出る言葉を想定することとした。そして、実際の授業では、動物の素晴らしさに気付いた発言も見られ、それを書き留めて掲示として残していった。

Q：説明文ハウスとは、どういうところから発想を得たものか。終わりのない文章であるが、どのような指導をしたか。

A：説明文ハウスとは、桃山学院教育大学 教授 二瓶弘行先生が提唱されているもの。これによって、文章中にいくつの事例があるか、説明の仕方はどのような特徴があるかをつかむことができる。1年生には難しいと思ったが、今回、キーワードの穴埋めの形式をとって、これを用いることとした。「終わり」のない文章であるが、「はじめ」の部分にまとめとなる文章が出てくることをおさえ、児童に説明した。

3 ご指導（高松市立高松第一小学校 香西里美教頭先生）

1年生の説明文の系統性は、「さとうとしお」・「どうやってみをまもるのかな」・「いろいろなふね」・「子どもをまもるどうぶつたち」という単元が設定されている。学習指導要領では、低学年の説明文単元では、事柄の順序を考えながら読むことが重点目標であり、それに加え、知識・技能領域である文章の共通点や相違点に気付くことも大切な指導事項である。本実践では、前半の二つの説明文単元を連続して行ったことで、説明文を読む上で大切となる、問いと答えの関係性にしっかりと着目することができた。また、インタビューブックの作成や説明文ハウスといった教材・教具を活用したことで、問い、答え、詳しい説明という繰り返しのある文章構成に気付くことができた。このような学習を1年生の段階から経験したことで、今後も児童は説明文教材に出合うたびに、「説明文ハウスをつくって考えてみよう。」「この文章の問いと答えはどこかな。」という視点で、文章を読むようになるのではと感じた。

学習意欲をもつためには、特に低学年の児童にとっては、「おもしろい」と感じられるような興味のある活動を仕組んでいくことが必要である。中・高学年になるにつれて、「役に立つ」「やりとげたい」といった有用性や達成感を求めるようになってくるものの、やはり児童にとっては、楽しく、学びたいと思える活動を設定することが、大変有効となる。本実践において一番盛り上がりを見せたのは、児童が動物になりきって動作化する場面であり、どの児童も生き生きと楽しそうに学習をしていた。国語科が好きな児童を育てていくために、子供を主体として学習活動を計画・展開した本実践を、ぜひ日常の授業づくりの参考にしてほしい。